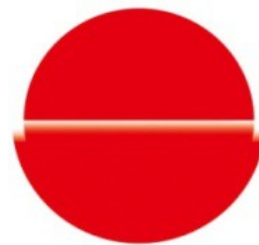


Niigata Award News

(食の新潟国際賞財団通信)



Niigata Award

2013/3/15 第15号

2013.新春講演会・賀詞交歓会

2013.新春講演会& 賀詞交歓会

15:30-17:00

新春講演会

講師: (株)セブン銀行

代表取締役会長 安齋隆氏

「2013年の経済展望とセブン
& アイグループの戦略」

17:00-18:30

賀詞交歓会

※ホテルイタリア軒にて開催。



当財団主催の新春講演会と賀詞交歓会が、2月19日ホテルイタリア軒にて開催されました。

新春講演会は、当財団評議員でもある (株)セブン銀行 代表取締役会長・安齋隆氏を講師にお迎えし、「2013年の経済展望とセブン&アイグループの戦略」についてお話いただきました。

約100名の聴講者を前に、前半はふるさと(福島)への思いや、日銀時代 支店長として赴任した新潟の思い出などをユーモアを交えながら語られ、後半は、スタートしたアベノミクスの今後について 過去の事例を踏まえたお話、さらに世界的なグローバル化が進む中で 日本が直面するであろう課題など、興味深いお話が続きました。

また「お客様が望むものを、望む時間に、望む場所にお届する」という小売業の本質を第一に、セブン&アイグループがお客様に支持されている具体例や、製造と流通がコラボすることの重要性など、他では聞くことの出来ない貴重なお話が、安齋氏のお人柄とともに 心に残る講演会となりました。

続いて開催された賀詞交歓会には、80名を超える方々がご出席くださいました。

古泉財団理事長の開会の辞に続き、森邦雄 新潟県副知事の来賓ご挨拶、篠田昭 新潟市長による乾杯で会はスタートしました。交歓会では終始 ながやかな雰囲気の中、皆様様々な情報交換をされていました。

最後は 当財団の池田弘副理事長による閉会の挨拶でお開きとなりました。



「食の新潟国際賞財団」中国訪問団の派遣

当財団主催による初の中国訪問団(団長・古泉肇理事長、団員15名)が平成24年9月7日～12日の6日間、中国黒龍江省を訪問しました。

平成24年は日中国交回復40周年の記念の年であり、当財団の国際賞の冠を拝した佐野藤三郎氏の足跡をたどり、日中友好のシンボル事業である龍頭橋ダム・三江平原開発地の視察と関連団体との交流を行いました。

副団長には五十嵐修平氏(当財団理事/亀田郷土地改良区理事長/新潟県日中友好協会会長)、同じく副団長には佐野氏と共に三江平原プロジェクトに直接携わった中山輝也氏(新潟県国際交流協会理事長/株キタック代表取締役社長)も参加いただきました。

日中関係が難しい時期にもかかわらず、訪問先では丁寧な応対と熱烈な歓迎を受け、佐野藤三郎氏の功績大きさと日中交流の歴史の重さも感じた訪中となりました。

視察は走行距離1900キロのバス移動という強行軍でしたが、車窓からの延々と続くトウモロコシ畑や稲作中心の農地はまさに圧巻で中国の食糧倉庫に相応しい風景でした。

移動車中では、団員の朱永浩氏(環日本海経済研究所 研究主任)、中山輝也副団長、柴田明夫氏(株資源・食糧問題研究所代表)3名の講義を聴講し、伊藤忠商事(株)ハルビン分公司峯村総経理からも現地の最新状況をお聞きするなど中身の濃い充実した企画でした。

今回の訪問を通じ佐野藤三郎氏の三江平原開発にかけた情熱と偉業を再確認するとともに、国際賞を通じて世界に伝え発信する必要性を強く感じました。



① 国営新華農場にて

↑① 国営新華農場のトウモロコシ畑。訪問団を歓迎の旗で出迎えていただいた。新華農場は総面積5万7千ha(亀田郷の5倍)農場人口2万5千人、農地は農家の個人所有で1戸当たり5ha～13haの大規模経営。各農家は都市住民の平均可処分所得を上回り、安定した裕福な農業経営をしている。

↓② 三江平原開発のシンボルである龍頭橋ダム。

1981年～84年まで佐野藤三郎氏を中心とする日中協力による「龍頭橋典型区農業開発調査」が行われ、1996年円借款30億円が調印され、1998年ダム本体工事着工、2002年に借用開始し、4万ha強の湿地が優良な水田・畑に変わった。

② 龍頭橋ダム





③ 黒龍江省農懇局との意見交換



④ 収穫前の新華農場

↑③ 黒龍江省農懇局：黒龍江省の農業政策・農業経営・管理をする機関。従業員：74万人。直属企業：丸三糧油、北大荒農業など多数。傘下農業：115農場。管理土地：544万ha(黒龍江省の12.6%)、総生産能力：穀物100万トン、肉10万トン、牛乳30万トン。(朱永浩氏 資料より)

写真提供：団員／高橋義輝氏・朱永浩氏

↑④ 黒龍江省の面積は日本の1.1倍。耕地面積は1180万ha、うち水田は260万haと日本の水田面積に匹敵する。省統計局によると、2011年の食糧生産高は5,570万トンで中国全体の1割強を占める。大豆、トウモロコシの生産は中国最大だ。このため、同地の生産動向が世界の穀物市場に直接影響を及ぼすことになる。(柴田明夫氏論文から)

最後に、帰国後「訪中団記録集」に掲載された 古泉団長の寄稿文の一部をご紹介します、訪中団派遣報告のまとめと致します。

「かねてから佐野藤三郎氏の足跡をたどり、龍頭橋ダムと周辺の広大な三江平原を視察したいと想っておりましたところ、実現し、所期の目的を達することができました。

新潟の亀田郷に続いて、中国三江平原においても水と土の壮絶な戦いに挑み、

困難を乗り越え、中国政府・中国農民と日本人はじめこのプロジェクトに関わった者が情熱を持ち続けられるよう指導し、最後まで諦めず成し遂げた 佐野藤三郎氏のこの偉業は

世界に誇れるものであります。 また食の新潟国際賞財団が 佐野藤三郎記念の冠を拝すること間違いはなかったと確認できたことは 大きな成果でありました。」

【現地の主な訪問先】

黒龍江省人民政府、ハルビン市人民政府、佳木斯市人民政府、黒龍江省龍頭橋水庫管理处、日中合弁・北珠精米加工公司、新華農場、黒龍江省農懇総局、ハルビン市高新技术開發区、黒龍江省水利庁、伊藤忠商事(株)ハルビン分公司

「食のクラスター」ヨーロッパ視察

新潟市から委託された「食と花の世界フォーラム」事業の一環として、産官学共同体を組織し食産業の地域振興を成功させているヨーロッパの2都市(ディジョン市・ワーヘニンゲン市)を視察。

2都市とも食のイノベーションが関連企業を潤わせ、地域の活性化に大きく貢献している状況を目の当たりにし、今後「食の新潟」の方向性を考えるひとつの指針になると思われる。

【視察の目的】

新潟が目指す「食のクラスター(集合・共同体)」の先進地域であるディジョン市(フランス)とワーヘニンゲン市(オランダ)

を訪れ、クラスター形成の経緯と現状を見聞すると同時に自治体が果たす役割について調査する。

【食のクラスターについて】

アメリカの経済学者 マイケル・ポーター氏が提唱する「クラスター」の概念に基づく。

従来の単なる関連企業の集積ではなく、そこに研究機関や自治体加わることにより、企業同士が競争しながらイノベーションをおこしていく共同体のこと。

そしてこのイノベーションが地域の振興を活性化させ 資産を育成するシステムにつながる。



フランス西部の都市・ディジョン市では、食のクラスター「ヴィタゴラ」を視察。

2004年 フランス政府の政策により、全国で71の競争力拠点が制定され、同種産業のクラスター集積が行われてきましたが、ディジョン市はそのうちの食の競争力拠点の1つになり、翌年には「ヴィタゴラ」が設立された。

「ヴィタゴラ」は食の改善・革新を目指し、さらに「味～栄養～健康」というテーマを共有するメンバーが、競争や経済開発を通じて目的達成を目指す共同体です。

多国籍企業から国内の中小企業まで、また 高等教育や訓練を含む研究機関等が参加し、その参加者が資源や知識をプールすることで、プロジェクトを具現化することを目的としている。現在は約150のメンバーを有し、その65%は中小企業である。 また運営予算の53%は 国および地方政府からの補助金による。



ディジョン市共同体でのブリーフィング



教育ファームの様子



続いて オランダのワーヘニンゲン市にある「フード・バレー」を視察。
「フード・バレー」とは ワーヘニンゲン市の周囲30-40K㎡の地域を言い、現在 約1400社以上の食品関連企業が進出している食のクラスターです。
ワーヘニンゲン市にフードバレーが形成された要因としては
①20年程前から多くの食品関連企業が周辺に存在していた
②オランダ唯一の農業大学であるワーヘニンゲン大学があったため研究者が集まるようになった ③国の優遇税制と地方政府の協働体制により 海外企業の参加が増加した・・・ことがあげられる。
フードバレーは ワーヘニンゲン大学&リサーチセンターを研究の中心とし食関連産業と連携をとりながら、アグリフード、生命科学分野でのイノベーションを生み出してきた。
フードバレー地域にある「フード・バレー財団」は、大学・市・州を主たるスポンサーとして運営。(EU・国も出資)
企業・政府・大学をつなぐ役割を果たし、ネットワーク構築のためのセミナー開催や、プロジェクトの開発支援を実施している。



フードバレー財団でのブリーフィング

フードバレーでの食品イノベーションの事例

- ①卵黄による加齢黄斑変性の治療
- ②肉と魚の代替品として100%植物由来の製品(ミートフリー)の製造販売
- ③海藻株の栽培と開発
- ④キノコベースの旨味調味料の開発・・・など

*上記は「フードバレーが選んだ20のフード・イノベーション」パンフレットより抜粋



「未来食堂」の様子

ワーヘニンゲンリサーチセンター内にある「Restaurant of Future (未来食堂)」を訪問。 食堂内には多くのカメラが設置されており、食品を選ぶ順番・選ぶ量・組み合わせ等を記録すると同時に、食べる時の表情までチェック。 これにより食事行動を分析し、イノベーションに反映させている。

【視察後記】今回訪問したフランス・オランダとは その位置付けが異なるが、新潟で食のクラスターを形成し、食の都市ブランドを確立することは 新潟の食産業をステップアップさせるために大きな意味を持つはずである。 また食のクラスターを産官学で推進していくことが出来れば、新潟を食品イノベーションの指導的地域にすることも可能なのではないかと。 最後に、今回は、新潟市・石塚里栄子 国際経済



部長、小林賢一 農林水産部長をはじめ 多くの方にご紹介いただいた現地スタッフのおかげで、大変有意義な視察となりました。 ご協力くださった皆様に心より御礼申し上げます。

【視察メンバー】門脇基二氏(新潟大学 農学部教授/新潟大学フードサイエンスセンター長)、鈴木浩行氏(新潟市・産業政策課 ニューフードバレー推進室長)、与田一憲 財団・常務理事

スペシャル サンクス < 順不同 >

特別会員

亀田製菓(株) (株)ブルボン 亀田郷土地改良区 新潟県農業協同組合中央会
学校法人 新潟総合学園 第四銀行 一正蒲鉾(株) 佐藤食品工業(株)
(株)栗山米菓 (株)新潟日報社 三幸製菓(株) (株)新宣 新潟市農業協同組合
(株)エイケイ 三菱商事(株)新潟支店 ホテル日航新潟 NST
(株)電通東日本 新潟支社 (株)新潟クボタ 亀田商工会議所 にいがた22の会

正会員

(株)第一印刷所 新潟県信用組合 (株)タカヨシ (株)本間組
石本酒造(株) (株)ミカサ 神山物産(株) (株)山忠
ショクザイ新潟(株) 丸七商事(株) 大東産業(株) 日本精機(株)
藤屋段ボール(株) 新潟工科大学産学交流会 (株)タケショー
(株)新潟博報堂 BSN新潟放送 新潟陸運(株) 東邦産業(株)
医療法人愛仁会 亀田第一病院 (株)新潟食品運輸 山崎醸造(株)
月島食品工業(株) 松田産業(株) 麒麟山酒造(株) (株)鳥梅
(株)フジテレビジョン 日本製粉(株)関東支店 日精サービス(株)
日本甜菜製糖(株) (株)山由製作所 新潟万代島総合企画(株)
(株)キタック 鍋林(株) レンゴー(株) 北越工業(株)
丸榮製粉(株) (株)鈴木コーヒー TeNYテレビ新潟
(株)栗田工務店 (株)細山商店 三和薬品(株) (株)藤井商店
セツカートン(株)新潟工場 ハセガワ化成工業(株)
(株)加島屋 (株)日本フードリンク (株)アド・メディック

個人会員

西澤 裕之
藤島 安之
大越 斎
有沢 栄一
和田 充彦
河内 直史

食の新潟応援団(賛助会)募集中!

食を通じて飢餓や貧困などに苦しむ世界の現状に目を向けると、日本にいる私たちにも食の危機が及びつつあり、世界の人々の命が一つにつながっていることがわかります。

食と私たちの命を守る本財団の事業に賛同し 応援してくださる皆様を募集しています。

詳しくはホームページをご覧ください。 アドレス：<http://www.niigata-award.jp/jp/join/>